



ものづくりは、 日本文化を世界に伝えるため。

富山・ミラノデザイン交流倶楽部 デザインセミナー&対談
講師:館鼻則孝「日本文化と伝統芸術の未来」
対談:館鼻則孝、能作克治

取材・文:タダカツ 写真:室澤敏晴

2015年1月に、富山・ミラノデザイン交流倶楽部によるデザインセミナーが開催された。講師は世界的に活躍するアーティストの館鼻則孝氏。「日本文化と伝統芸術の未来」をテーマに、自身のルーツを掘り下げて日本文化を世界に発信する創作活動や、伝統芸術の未来について語った。

手づくりをあたりまえとして 育った子ども時代。

館鼻氏の曾祖父と祖父は富山県出身。1970年代まで、一家は新宿歌舞伎町で銭湯「歌舞伎湯」を営んでいた。館鼻氏は新宿で生まれ、自然豊かな鎌倉で育つ。母親は、芸術教育を柱とするシュタイナー教育で重要な、ウォルドルフ人形の作家。館鼻氏は、手づくりの人形や遊び道具に囲まれ育った。「ゴジラやウルトラマンの人形が欲しくても買ってもらえなかった。いと思うと、手づくりに囲まれた暮らしは豊か。母にはいつも、欲しいものは自分でつくりなさいと言われて育った。コミュニケーションが苦手だった自分にとって、ものづくりがコミュニケーションになっていった」と振り返る。

東京藝大の卒業制作が、 レディー・ガガへとつながった。

館鼻氏は中学卒業時には美大を志望。高校一年生から予備校に通いデッサンを学ぶが、周囲のレベルの高さにショックを受ける。その頃から、洋服や靴を独学でつくり始めていった。

「絵は下手でも、手で生み出すことには自信があった」。目指したのはファッションデザイナー。ものづくりを通して人とつながる仕事がしたいという思いがあった。世界で活躍するためには、自分にしかないものを探る必要があった。見つけたのが自分のルーツである「日本」。西洋文化に染まる以前の、純粋な日本文化や芸術を学んだ上で、世界に打って出ようと考えた。

そこで日本の伝統を重んじ、昔ながらのものづくり、手仕事で学べる東京藝術大学美術学部工芸科に入学。染織を専攻し、友禅染を学んだ。研究課題として選んだ対象は花魁。目指したのはアヴァンギャルドで華やかな世界観だ。

大学卒業後に自身のファッションブランドを立ち上げるため、これからのスタイルをつくるものづくりを目指した。そして、2010年に卒業制作としてつくったのが、花魁の高下駄から着想を得た靴やドレスだ。東洋と西洋をコラボレーションさせた作品は、日本人としてこれから何をすべきかを考え抜いた上でのものであったが、学内ではまったく評価されなかった。

しかし、この作品を、館鼻氏は世界に売り込んだ。コネクションがない中、著名なスタイリストや出版社、ファッションデザイナーのエージェントなど、ネットで見つけたアドレスに自ら100通ほどメールを送信。そして、返事が来た3通のうちの1つが、レディー・ガガのスタイリストからだった。

2010年から2012年頃にかけて、レディー・ガガの靴を次々と手がけていった。以来、その靴はヒールレスシューズと呼ばれるように

なり、館鼻氏の名は世界に広まった。しかし、ガガとの仕事では材料費しかもならず、当時の生活は、実はとても苦しかったと言う。「でも、レディー・ガガさんとの仕事があったからこそ、いまがある。彼女は言わば、現代の花魁。いいタイミングで出逢い、いい仕事ができた。文化的なコラボレーションで、互いにブランディングできたことはうれしかった」大学卒業からわずか数年にして、館鼻氏の作品は、ニューヨーク州立ファッション工科大学美術館やメトロポリタン美術館、ヴィクトリア&アルバート博物館などに収蔵された。現在では、ダフネ・ギネスなどの顧客、支援者を得て、活動の場をさらに広げている。



最新の文化を伝えるものづくり。

館鼻氏は、「ものづくりはコミュニケーションであり、靴は日本文化を世界に伝えるための一つの手段。自分の一番やりたい事を最も



的確に表現する手段を選んでいる」と語る。最近では、国内外のグループ展への出展、最新技術と日本の伝統技術を融合させたアート作品などを次々と発表している。靴以外にも、かんざしの彫刻などさまざまなアート作品を手がけ、高岡の能作や螺鈿の武蔵川工房とのコラボで注目を集める。素材も革、木、アクリル、ステンレスなど様々。3D技術を使ったガラスの靴の制作など、現代的な素材、最新技術に挑戦し、伝統と革新を融合したものでづくりで、世界を驚かせている。

受け手が評価してこそ、 日本文化は守られる。

「新しいものづくりは、最初は評価につながらないこともあるが、必ず見てくれている人はいる」。海外には自分のものさしをしっかりと持って、評価する人が多い。「自分にしかできないこと、時代を読み解く力があれば可能性は大いにある」と力を込める。ただし、アーティストが情報を発信しても、受け手がいないと意味がない。「世界が評価したものしか日本では売れない。日本人にもっと、自分がいいと思ったものを評価してほしい。発信側と受信側は、共に文化をつくる関係にある。需要や文化を、現代を生きている僕らがつくり続けていく必要がある。誰でも将来の日本文化をつくることはできると思う」と締めくくった。

富山の技とのコラボで、 日本の文化を牽引してほしい。

続いて、株式会社能作代表取締役社長の能作克治氏との対談へ。3年前から館鼻氏とアート作品づくりを始めた能作。伝統的な日本の手仕事と最先端技術の両方を駆使した最新作の完成を目指す。

能作氏は、館鼻氏のものづくりの素晴らしさは、全ての情報をオープンにして職人をやる気にさせる姿勢にあると語る。従来、職人は「何に使われるかわからないパーツをつくる」といった仕事が多く、ものづくりの最終形までの情報を得る機会がなかった。そこで能作でも、直接顧客と対話しようと、自社開発のものづくりを始めた経緯があったのだ。

館鼻氏は「職人さんもスタッフもみんなに当事者としていてほしい」と語る。チームで動くほうが力は大きくなる。そして作品を評価し買うことが、アーティストや職人の支援になる。「アートは作家側が生み出しているように感じるが、実際に価値を与え、守り、新しいステージを作り上げているのは見る側、受けとる側。その重要性を認識して欲しい」と続けた。

また、最近では工芸品が雑貨化している点の問題だと館鼻氏は指摘。ディレクターやアーティストと組んで、「いまこそ威信をかけたものづくりをしていくタイミングなのではないか」と話す。能作氏も、「自社でもそういう思いがあり、館鼻氏とアート作品に挑んだ。生活工芸で知られる能作がアートを発表することで、日本の伝統産業にいい影響を与えたい」と語る。能作氏は、今後もチーム富山で、多様な技術を生かし、館鼻氏には日本を支えるアーティストになって

欲しいとエールを送った。いま、アーティストと職人たちが一つのチームをつくり、ともに新しいものづくりで世界へと挑んでいる。見る側にも、新しい日本のものづくりや文化を評価し、守り育てていく役割が求められている。



館鼻則孝
アーティスト、NORITAKA TATEHANA代表

1985年東京生まれ鎌倉育ち。15歳から制作活動をスタート。その後東京藝術大学へ入学し、染織を専攻。友禅染などを学ぶ。2010年には東京をベースとする自身のブランド「NORITAKA TATEHANA」を本格的に立ち上げ、コレクションを発表。その靴は、レディー・ガガが愛用していることでも有名。

能作克治
株式会社能作 代表取締役社長

1958年福井県出身。1980年大阪芸術大学芸術学部写真科卒業。新聞社勤務を経て、1984年(株)能作入社。2005年錫100%の鑄物キッチンウェア等の製造開始。2009年日本橋三越本店に「高岡・能作」を開店。現在、東京3店舗、大阪1店舗、福岡1店舗、富山3店舗の直営店を展開。2013年「第5回ものづくり日本大賞」経済産業大臣賞受賞。2010年メゾン・エ・オブジェ単独初出展。現在、伝統工芸高岡銅器振興協同組合理事、高岡銅器団地協同組合副理事長、公益社団法人富山県デザイン協会理事。

デザインセミナー&対談
2015年1月24日(土)14:00~16:00
会場/富山県立近代美術館1階ホール
この事業は電源立地地域対策交付金を活用しています。